

「底が突き抜けた」時代の歩き方 269

「怖いもの知らず」で突き進む - 真紀子外相の人気の秘密

《この人は「更年期障害風」の「ヒステリー」で、「知的持続力がなく」、「井戸端会議」レベルの話題しか持たない。平気で会談に遅刻する「常識外れ」だから、「女子ども」はダメなのだとかヤの外に置かれて業務が滞っている。こんな「オバハン大臣」は、一刻も早く退任して「専業主婦」に戻れ - 田中真紀子外務大臣について書かれた男性週刊誌の見出しを内容に沿って並べてみると、こうした女性差別に満ちた文章ができあがる。女性週刊誌はそれを「女だからの陰湿イジメ」と看破するが、新聞は更迭論を展開する。》と冒頭から書き出して、真紀子外相問題に切り込む（朝日新聞01.12.15）のは、ライターの島崎今日子である。《ここまで書かれた男性の政治家はいない。女性を議員会館に連れ込んだ山崎拓幹事長のスキャンダルは、あっという間に鎮火した。石原慎太郎東京都知事は、テレビカメラの前で記者を面罵^{めんば}してもたたかれない。男性の大臣を、だれもオッサン大臣とは呼ばない。だが、外相は「オバハンだ」と非難される。》と続ける。先の福田氏のいう「娘の政治」は、ここでは「オバハン大臣」として社会的（？）に成熟したかたちで登場してくる。

ところで、なぜ真紀子外相だけが「オバハン大臣」と呼ばれるのか。《そもそも、政治の世界は男性社会であり、政治家はみんなオッサンである。土井たか子社民党党首に対するかつてのほめ言葉は、「男らしい」であった。5人の女性大臣の中で、川口、森山、遠山の3大臣は元官僚。自らをオッサンの物差しに合わせて、男社会を勝ち抜いてきた「名誉男性」たちである。扇大臣は「女優上がり」と色物扱いされながら、「女の本分」をわきまえ、男性議員の倍近い年月をかけてようやく大臣になれたのだ。》

しかし、他の4人の女性大臣と較べて、《田中角栄元首相の一人娘であった外相だけは、「名誉男性」になる必要も、女としての分をわきまえる必要もなかった。》という。《米国留学で自分の意志を表明する習慣を身につけ、夫という存在なしにファースト・レディーの立場も楽しんだ。妻のような夫を持ち、子どもを3人育てた。当選3回という男性以上のスピード出世で、今まで女性に与えられたことのないポストに就任。働く女性につきまとう「ガラスの天井」にも、男を超えて成功することをためらう「成功恐怖」にも無縁。「女の幸福」も手にしている。そういう意味では、女と男の両方の快樂

を享受する「怖いもの知らず」と言えるだろう。》この「怖いもの知らず」が「オッサン」である福田氏には、好き勝手に振る舞う真紀子外相の「幼稚な、社会性の欠落した行為」に映るのである。

《「怖いもの知らず」は「世間知らず」と同義語である。外相が他の女性大臣と違うのは、まさにこの点である。そのために彼女だけが「オバハン」という称号を授けられる。男性マスコミが使う「オバハン」は、社会化されていないという記号にほかならない。》

しかし、真紀子外相が「国益を破壊している」かどうかは別にして、あまりにもズケズケとモノを言うことによって物議を醸していることについては、島崎氏はどうみるのだろう。《確かに外相は根回しや人を懐柔する術を持たず、人の気持ちをおもんばかることもない。が、それゆえ正しいと思えば、同志であるはずの小泉首相の靖国参拝をためらわずに批判する。プライドの高い外務官僚のご機嫌がとれないばかりか、彼らを怒鳴りつけ、国民の期待にこたえたいと「機密費の解明が私の使命」と一歩も譲らない。》

福田氏の指摘する官僚にたいする「一種の主君意識」のあらわれということであろうが、外交における「国益の破壊」をあげつらう彼は、長年にわたる外務官僚の勝手仕放題が真紀子外相の就任によって白日の下に晒された、乱脈な経理感覚によるもう一方の「国益の破壊」のほうには目を向けないという片手落ちをも演じていることが浮かび上がってくる。

《自分たちの常識で計れない存在ほど、恐ろしいものはない。外務官僚や政治家、マスコミが外相を批判し嫌悪するのは、実際のところ、「外交に支障をきたす」ためとも、「政策や政治手腕がない」ためとも思えない。膨大なリークと罵詈雑言。あからさまな排除。「結果を出せていない」と断ずるが、結果が出ないように仕組まれているのではないが。彼らは自分たちが営々として築き上げてきたシステムや枠組みを、一瞬で壊される恐怖を感じるのだろう。それが、彼女を「物の怪」と呼んで異界に追いやろうとする理由である。》

こうみる島崎氏からすれば、福田氏が社会的成熟を拒否している真紀子外相の数々の乱行に不気味さを感じるのも、単に真紀子外相が彼の「常識で計れない存在」であるだけのことかもしれない。いよいよ島崎氏は、真紀子人気の秘密に踏み入ろうとする。

《外相の言動がすべて正しいとは言わない。殿上人のわがままさで庶民感情を逆なでにして、やり方が下手だと思う。だが、上手に立ち回れる人なら、男のネットワークで固く結ばれた政界の構造や、その結果のゆがみが今のようにあぶり出されることもなかったということだ。国会中継の視聴率を上げたことも「成果」だが、このあぶりだしこそ歴代の男性外相が出せなかった「成果」であろう。テレビの街頭インタビューや新聞の

投書欄でいまだに外相を支持する人には、主婦や会社をリタイアした年輩男性が多い。縦社会の枠組みの外にいて、はじめて見えるものと言えることがある。下がってもなお57%という高支持率を、大衆の浅はかさと片づけてはいけない。》

若い身空で保守言論界の大御所のような位置に収まり、かつ慶応大助教授の肩書きを持つ福田氏が、「縦社会の枠組み」の内で自分も加わって、「営々として築き上げてきたシステムや枠組みを、一瞬で壊される恐怖を感じ」ているのかもしれないが、自分の常識外で進行している事態だからといって、真紀子人気について「なぜ日本人はかくも不気味になったのか」というような言い草は、(真紀子外相の傲慢さを指摘する自分自身が)あまりにも傲慢ではないかと、島崎氏の文章は暗に語っているように聞こえる。さて、この文章の締め括りはこうだ。《マスコミは、外交に支障をきたし、国益が損なわれると、外相の責任を声高に叫ぶ。だが国益の名のもとで何が行われてきただろう。先の戦争も国益を求めた結果ではなかったか。自浄能力のない国の国益とはいったい何なのか。したり顔で国益をと見え、外相を`女`としてしかりつける`男`の`ごう慢`さの向こうに、沈み行く日本の未来が見えるようだ。》

立ち位置が異なれば、見方も180度変わるという際立った実例が、福田、島崎両氏によって提出されているといえよう。島崎氏の視線は、福田氏に代表される男の視線に対する^{から}搦め手からの批判であることがわかる。少々下品ないいかたをすれば、「オッサン」の見方と「オバハン」の見方の対立であり、残念ながら、「オッサン」に分が悪いのは、「オバハン」の見方が分かっていないことである。だから、不気味だの、幼稚だのと、慨嘆するしかない。ところが「オバハン」には、「オッサン」の見方と衝突している同じ「オバハン」の真紀子外相の苛立つ気持が手に取るように分かっている。女は強くなったのだ、男に覇気がなくなったのだといいながらも、まだまだ社会の根幹は男の手の内にあり、何度も煮え湯を呑まされてきている「オバハン」たちは、「オッサン」たちの巧妙な遣り口を見抜いてきているから、自分たちの立場と卑劣な外務官僚に取り囲まれて孤軍奮闘している真紀子外相の立場とが自然に重なってきて、遠くからの支持を投げかけているのだ。

もちろん、「オッサン」の中には福田氏と違って、「オバハン」の見方がわかる者もいる。《けっきょく、真紀子外相も、外務省がどんな^{ちみもうりよう}魑魅魍魎の伏魔殿なのか、言葉ではわかっているけれどもこれほどまでとは想像しなかったんだろうさ。そんなところに、人気だけで経験も後ろ盾もなく徒手空拳で飛び込んで行ったもんだから、つぎつぎとこういう騒動を巻き起こす結果になっちゃうんだ。

ただ、いってることを聞いてれば、真紀子外相のほうが案外まともなことをいってる

ことも多いぜ。

外務省人事騒動についても、大臣に人事課長の任命権がありながら、実質は外務省幹部がすべての人事を握ってて、外務省の内部人事は幹部たちの都合のいいように好き勝手に人事を動かしているだけだからね。

おばさん大臣の真紀子外相によって、そういう外務省の体質が明るみに出たわけだけど、いままでの外務大臣ってのが、いかに役人のいいなりになっていたかという話なんですさ。

いままでの外務大臣ってのは単なるお飾りの、いてもいなくてもいい存在なんで、黙って役人のいう通りに動いていればよかったですよな。》

福田氏のように鳥瞰的なまなざしで大局的な判断を下そうとするわけでもなく、また島崎氏のように虫瞰的なまなざしで一つ一つ拾い上げていこうとするわけでもなく、いわばはずかしのまなざしで横切ってみせるようにこう談ずるのは、『週刊ポスト』(01.12.7)のビートたけしである。漫談調で真紀子外相を、『スカウトされるままにアイドルタレントの事務所に入っちゃったタレント』にたとえて、次のようにいう。

《本格的ミュージシャンを目指していたのに、その芸能事務所に入ればデビューできると思って入ってみたら、毎日キヤーキヤー騒がれるだけだったというね。しかも、ピエロみたいな衣装を着させられて鉢巻き巻いて、ヘンな踊りと歌ばかりで、テレビの仕事なんてカッコいい仕事はぜんぜんない、団扇^{うちわ}か提灯を持たされて、毎日地方の営業の仕事ばかりに出されて、ひどい目にあってるんだというね。そんで「自分はずっと本格的な歌をやりたい」っていいだして、ヒンシュクを買っているようなものなんですさ。

マネージャーから「バカヤロウ、お前を売り出すのにいくらかかったと思ってるんだ。それにこの業界をなにもわかってないお前になにができる。黙っていうこと聞いてればいいんだ」って脅されてるようなもんです。「あんまりいうこと聞かないんだったら、干してやれや」ってなもんだな。

外務大臣が外務省人事課に籠城なんて、タレントが楽屋に立てこもるようなものだし、仕事をドタキャンしたりするのも同じだよ。

おまけにこのタレントはよく内幕をしゃべっちゃうんだな。芸能界に、よそでは絶対しゃべっちゃいけない、それを暴露すればファンの幻想を壊しちゃうというタブーがあるのと同様に、外務省でも政府でも、表沙汰にははいけないうちうちの秘密ってのがあるんだよ。真紀子さんを外務大臣に選んだ小泉総理だって、最近「内輪の話をベラベラしゃべりすぎ」だって怒ってるというね。

まったく、自分を主張しはじめたアイドルタレントほど、そいつの「上がり」で食っ

てる大人たちにとって始末に負えない存在はないんでね。下手に斬り捨てると、暴露本でも出されそうで、斬るに斬れないというね。

しかし、こうも考えることができるな。真紀子外相は「裸の王様」で、本当のことを思いっきりいっちゃうガキみたいなものなんだってね。》

もちろん、国民の税金で成り立っている外務省と、アイドルが稼いでいるタレント事務所とは根本的に異なるから、ビートたけしも政治の世界で、《本音ではみんなも、誰かがいってくれないかなって思いがある》なかで、《そうやって、真紀子外相も女身ひとりで頑張っているとオイラは思うね》と評価して、《いいか悪いかは別として、真紀子外相が政治家と官僚の関係を変えたのは確かなんだからさ、これからの政権は、真紀子さんを「三種の神器」にすると決めたらどうかね。新しい政権には、必ずどこかの省の大臣として真紀子さんが入ってなきゃいけないという決まりを作ってね。(中略)炭鉱の坑道に持って行くカナリアと同じで、真紀子さんが怒ったり騒いだりしているのを見れば、その省庁がいかにヤバイことをやって、国民にとって大損になる省かがわかるんでね。田中真紀子はそのバロメーターになるんだっての》というところまで、いつも通りに脱線していく。

このビートたけしの放談によって、真紀子外相の最大の功績は、国会というこれまで“お笑い”とは全く無縁であった見せかけの政治論争の場所に、“お笑い”を持ち込んだことではないかという気がしてくる。本心を隠したタヌキおやじ連中がいかめしく陣取る中に、本音でズバズバと言いつける異類が入り込んだものだから、連日てんやわんやの大騒ぎが繰り広げられる本物のドタバタ喜劇と化し、これまで全く見向きもしなかった国会でその光景がテレビで映しだされるのだから、視聴者としてはこれほど面白いものはない。神聖な国会の場をドタバタ喜劇にするなど、けしからんということではない。本当は誰もが腹に思っていることを口に出すなら、国会の場もまた、ドタバタ喜劇と化するのに、そうならないように根回しや二枚舌などでもっともらしい政治家にとっての儀式にしてきたのを、真紀子外相は本当の姿を露出させるために、トリックスターを演じているとみることもできる。それにしても、真紀子外相ほど、彼女をどう評価するかによって、その人の立ち位置がくっきりとあぶり出されてくる政治家はいないのではないか。いずれにしろ、福田氏のように敷居が高ければ、真紀子外相の人気の秘密は捉えることができないのは確かだ。ビートたけしのはずかひのまなざしは、芸というものはどこまで敷居を低くするかにあるんだよ、ということを教えてくれているのではないか。でない、と、あらゆることが掬い取れないからね、と。 2001年12月31日記